



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会的コミュニケーションと間主観性：ハーバマスと丸山眞男を軸として〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	高橋, 道子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第11861号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58887
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Michiko_Takahashi_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：高 橋 道 子

審査委員	主査 教授	鈴 木 純 一
	副査 特任教授	山 田 吉二郎
	副査 准教授	長 島 美 織

学位論文題名

社会的コミュニケーションと間主観性

ーハーバマスと丸山眞男を軸としてー

本論文の特徴と独創性に関して以下のような点を挙げることができる。

第一に、この論文は社会思想史における抽象的な概念を用いて理論的な議論を展開しているが、その水準は十分に高度なもので、従来の研究を引き継ぐと同時に、それを新たに展開させる可能性を示している。具体的には、ハーバマスを中心に社会的コミュニケーションの理論を丁寧に跡づけ、その理論の核となる構造と問題点を明確に引き出すことで、その分析装置としての能力を拡大させている。第二に、その際、西欧社会思想においていわゆる「間主観性」と称されてきた（コミュニケーションの）主体間で共有される了解領域の系譜に関し、暗示的な形でしか論じられていなかった日本思想史においてもその対応構造を検証することで、社会的コミュニケーションと間主観性の関係を二つの型として可視的にした点が挙げられる。また、その作業の中で、丸山眞男という思想家に見られる問題意識、すなわち、西欧的な自律的・合理的主体が社会的意識形成一般の前提あるいは民主的規範とされたこと、またそれが共同体の在り方の相違を十分に考慮することなく導入されてきたことに対する批判的な視点が浮き彫りにされている。執筆者は、これがハーバマスの理論が内包する問題性とパラレルなものであることを指摘するが、このことは従来ほとんど論じられることはなかった点である。この丸山の視点を通過することによって、第三の理論的な特徴が浮かび上がる。すなわち、ハーバマスが明示的に主張しているコミュニケーション的合理性から社会的意識決定への連続性、そしてその反省的間主観性の場としての「公共圏」という構図の中には、背景とされた「生活世界」という概念が要請する「前反省的間主観」が内包されていることを理論的に明らかにした点である。以上のような特徴を持つ本論文は、近年数多く見られる

メディア分析に特化された研究とは異なり、地域的・歴史的・文化的・思想的な了解過程の相違に踏み込むことで、社会的な意思決定の在り方や共同体における主体相互の関係、そしてそこで構造化される間主観の違いに原理的な説明を試みる仮説を提示した点で大きな意義が認められる。このような分析によって初めて、複雑化し多層化された文化のリアリティに耐えうるような社会的コミュニケーション、社会統合、社会的合理性といった概念による考察が可能になり、流動化する現代情報社会においても有効な相互理解や合意形成の構築に寄与するものと思われる。

口頭試問では、以上のような特徴が、高く評価されるとともに、以下のような質疑応答がなされた。まず、ハーバマスのコミュニケーション理論が持つ新たな側面と可能性を提示しているが、ハーバマス自身はこれに対しどのようなスタンスでいたのかという問いがなされた。これに対して、執筆者は、ハーバマスにはドイツの歴史に関する極めて強い反省的な意識があり、生活世界と前反省的な間主観性の繋がりあるいはその優位性を前面化する危険性を回避していたと考えられる、と回答した。次に、間主観性を構成する「主体」の歴史的・地域的・文化的相違について、ここで明らかにされているもので十分に説明されているか、これ以外にも考えられるのではないかという疑問に対しては、確かにすべてではないかもしれないが、大きく二つの型があることは明らかであり、この分類が反省的な間主観と前反省的な間主観に対応し、この構図は、現代の社会的コミュニケーションを分析するのに十分な有効性を持っているという説明があった。また、ハーバマスが理論的な展開をする際に用いる「抗事實的（反事實的）」および「理想的な発話状態」という措定の意味と意義についての説明が十分ではないのではないかという疑義に対しては、まとまった形での集中的な記述にはなっていないものの、全体においても、また関連するテーマを論ずる際にも理論的には整合的な形で適用されており、論旨を変更させるものではない、という趣旨の説明があった。他に、若干の概念定義の揺れは、ハーバマスの理論的な揺れでもあり、そこから問題の糸口が明らかになったこと、具体的な事例分析がやや手薄ではという問いには、第一の目的は理論的な研究であり、事例はそのイメージを簡潔に示すにとどめた等、説得力ある形での応答があり、疑問として挙げられた点はいずれも本論文の致命的な欠陥とは認められなかった。全体として、極めて粘り強く作り上げられた力作で、その成果が十分示されていると評価された。以上のことから、本論文は、博士学位論文の要件と水準を十分に満たすものであり、申請者は、学位を授与される資格があると審査委員会は全員一致で判断した。